

[学術論文]

子育て支援における「わらべうた」の役割

—家庭における「わらべうた」の受容について—

The Role of “Children’s Play Songs” in Child Care Support:
The reception of “Children’s Play Songs” at Home

古賀弘之、神谷良恵

Hiroyuki KOGA Yoshie KAMIYA

Studies in Humanities and Cultures

No. 20

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 20号
2014年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
FEBRUARY 2014

[学術論文]

子育て支援における「わらべうた」の役割*

—家庭における「わらべうた」の受容について—

The Role of “Children’s Play Songs” in Child Care Support:

The reception of “Children’s Play Songs” at Home

古賀 弘之¹

Hiroyuki Koga

神谷 良恵²

Yoshie Kamiya

要旨 本研究では子育て支援の一環として実施された「わらべうた」を通じた親子あそびが、保護者にどのように認識されているかに加え、実際に家庭において保護者がどのような「わらべうた」をどのくらいの頻度で歌っているのか、また歌っている場合はどのような場面で歌っているのか等について探索的に検討することを目的とした。子育て支援事業で「わらべうた」を取り入れている「親子の会」15箇所質問紙の配布を依頼し、88名分の有効回答が得られた。回答内容を分析した結果、保護者の87%が家庭でわらべうたを歌っていた。その主な理由として「子どもと一緒にあそびたい」、「わらべうたを子どもが喜ぶ」という回答が挙げられていた。「家でわらべうたをするきっかけ」に対する回答は、「会への参加」(58人)が最も多く、「家でわらべうたを歌う場面」に対する回答は子どもと「遊んでいるとき」(60人)が最も多かった。実際に歌われている曲は「このここのこ」「だいこん一本」(各16人)が最も多く、あそびの種類による分析を行った結果からは「揺らし遊び」と「くすぐり遊び」が多かった。「家庭でわらべうた遊びをすることに対する利点について」自由記述で回答を求めた結果からは、「子育てを楽しくできる」「あやし方がわかる」など、育児に役立つことを利点として挙げた記述が多くみられた。以上の結果から、わらべうたを家庭で歌うことで、母親と子どもが上手くコミュニケーションを取ることができるようになり、子育てがスムーズになるため、母親自身にも余裕ができ、子どものことがより可愛いと思えるようになるという良い循環を生み出すということが示唆された。したがって「わらべうた」を子育て支援事業の一環として提供することは、家庭において母親と子どもの両者を支援していると考えられた。

キーワード：子育て支援、家庭、わらべうた

* 本稿は問題・目的を古賀が担当し、方法・結果・考察を神谷が担当した。

¹ 名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 准教授

² 特定非営利活動法人 名古屋コダーイセンター もんもの木

1. 問題

幼稚園や保育所では、乳幼児を対象とした音楽的表現活動として、スイスのダルクローズが考案したリトミックや、斉藤公子の考案したリズム運動などが導入されている。ハンガリーのコダーイが考案したコダーイ・メソッドの理念に基づくわらべうた遊びも、保育現場で乳幼児を対象とした音楽的表現活動として重要な位置を占めている。

様々な音楽的表現活動がある中で、リトミックやリズム運動が専門的な知識や技術に加え、ピアノという楽器を必要とするのとは異なり、「わらべうた」は保護者がうたと遊びをおぼえれば、家庭で子どもと関わる際にも実施できるという利点がある。

わらべうたとは、民謡に含まれ、子どもたちが遊びながらうたうものである。小泉¹⁾によると、民謡の概念は、①創作者が問題とされない唄であること、②記録によらず伝承的であること、③没個人的で、郷土性を持つ集団による伝承であること、④時間的に相当の歴史性をもつことと定義されている。その上で、わらべ唄の音組織や旋律法は、民謡のもっとも基本的な要素を端的に示しており、一般にその民族のもっとも古いスタイルを保持している可能性があると言われている。

わらべうたは、本来は主に学齢期の児童が遊ぶものであった²⁾。しかし、ハンガリーでコダーイ・システムを学んだ羽仁協子が、1968年に日本にコダーイ芸術教育研究所を設立し、乳幼児を対象とするわらべうたによる保育実践を展開したことが契機となり、保育現場における音楽的表現活動として重要な位置を占めるようになった³⁾。

わらべうたによる保育実践は、音楽的な側面だけでなく、乳幼児の発達の側面を促すものであることが、様々な研究の中で主張されている。

例えば、わらべうたの中でも、主に乳児を対象に行われる「あそばせうた」では、大人と子どもが向かい合って行うあそびが多く、大人と子どものコミュニケーションを成立させ、スキンシップを通して視覚、聴覚、触覚等の感覚の発達を促進させる。

「あそばせうた」の中でもくすぐり遊びは子どもの笑い声をひきだす。この遊びは2者の信頼関係を築き、子どもの発声を笑い声とともに促すことに加え、触覚の発達を促す等の機能を備えていると考えられる。正高⁴⁾は、乳児の笑いが言語の獲得と関連していることを明らかにしている。また、山口⁵⁾はくすぐり遊びと親の養育態度について調査を行った結果、受容的で温かい養育態度の母親であるほど、子どもとくすぐり遊びを行う頻度が高いことを明らかにした。

乳児とわらべうた遊びについて、木村⁶⁾はハイハイがうまくできていない子どもが多くみられるようになったことを指摘し、わらべうた遊びを通して身体的な発達を促し、ハイハイがうまくできるようになる方法を紹介している。また、丸山⁷⁾は、大人が子どもを抱えて体全体を振る「ゆさぶり遊び」は、平衡感覚を養っていると指摘している。「ゆさぶり遊び」は、わらべうた遊びの中にも様々なものがみられる（「このここのこ」「こりゃどこのじぞうさん」など）。

幼児とわらべうた遊びについても、運動発達、空間認知、平衡感覚、社会性、言語能力など、総合的な発達がわらべうた遊びの中で促されることが指摘されている⁸⁾。

つまり、わらべうた遊びは乳幼児の発達や親子間のコミュニケーションを促すのに有効な手段なのである。したがって、親子間のわらべうた遊びの機会を提供することは、「児童が生まれ、育ち、生活する基盤である家庭における児童養育の機能に対し、家庭以外の私的、公的、社会的機能が支援的にかかわること⁹⁾」という子育て支援に相応しい活動と考えられる。

しかし、子育て支援では、支援者側は参加者に対し、一方的に何らかの子育て支援サービスを提供することに終始しており、子育て支援において提供された内容が実際にその後の子育てにどのように反映されているかは把握されていないのではないだろうか。

斉木¹⁰⁾は、保育におけるわらべうたの有用性が様々な研究で主張されている一方で、保護者にとってわらべうたがどのように認識されているかを検討した研究がみられないことを指摘し、子育て支援におけるわらべうたが果たす役割について、地域公開された親子わらべうた遊びの参加者を対象に、質問紙と聞き取りによる調査を行った。その結果、わらべうた遊びは、子どもと大人のどちらにとっても親しみやすいため、歌ったり遊んだりしやすいこと、大人と子どもが相互に働きかけることができること、子どもの成長と発達を促すだけでなく、大人も心理的な変化が促され、子育てに対する積極性が高まるということが示唆された。しかし、斉木の研究では、「保護者にとってわらべうたがどのように認識されているか」という点については検討されているが、家庭でわらべうたがどのように受容されているのか、つまり「実際にどのような曲が歌われ、どのように実践されているのか」という具体的な内容までは検討されていなかった。

2. 目的

本研究では、子育て支援の一環として実施された「わらべうた」を通じた親子あそびが、保護者にどのように認識されているかに加え、実際に家庭において保護者がどのような「わらべうた」をどのくらいの頻度で歌っているのか、また歌っている場合はどのような場面で歌っているのか等について探索的に検討することを目的とする。そして、子育て支援事業で「わらべうた」を取り入れることが、どのように子育てを支援していると捉えることができるか考察を行う。

3. 方法

3-1 調査期間

2013年8月中

3-2 質問項目

1) 調査協力者の性別・年代・子どもとの関係

調査協力者の特徴を把握するために、性別・年代・子どもとの関係について尋ねた。年代は「10代」から「50代」までの5項目、または「その他」の項目のいずれかを選択させた。子どもとの関係については「母」、「父」など、「その他」を含む6項目のいずれかを選択させた。

2) 「親子の会」への参加回数

参加回数について「初めて」、「2回目」、「3回目」、「4回目」、「5回～10回」、「11回以上」の6項目のいずれかを選択させた。

3) 参加した子どもの年齢

当日「親子の会」に参加した子どもの性別と年齢を記入させた。きょうだいを連れて来ていた場合は、同様にその子どもの性別と年齢を記入させた。なお、年齢は月齢まで記入させた。

4) 初めて「親子の会」に参加したときの理由

「わらべうたが好き」、「知り合いに誘われた」など、「その他」を含む7項目のいずれかを選択させた。

5) 家庭でのわらべうたの普及率

家庭でわらべうたを歌うかについて「はい」もしくは「いいえ」で回答させた後、「はい」と回答した場合は「子どもと一緒にあそびたい」、「自分が癒される」など、「その他」を含む9項目について「当てはまらない(1)」～「当てはまる(4)」の4件法で評定させた。「いいえ」と回答した場合は「時間がない」、「子どもが喜んでくれない」など、「その他」を含む6項目について「当てはまらない(1)」～「当てはまる(4)」の4件法で評定させた。

6) 家庭でわらべうた遊びをするきっかけになった事象

「会への参加」、「わらべうたの絵本」など、「その他」を含む8項目の中から選択させた（複数回答を含む）。

7) 一日に歌うわらべうたの曲数

「1曲」、「2～5曲」、「6～10曲」、「11曲以上」の4項目のいずれかを選択させた。

8) わらべうたを歌う場面

「お子さんが起きたとき」「お子さんが寝る前」など、「その他」を含む10項目の中から選択させた（複数回答を含む）。

9) 家庭で歌うわらべうたの曲名

曲名について記入させた。複数ある場合は列挙させた。

10) 家庭でわらべうた遊びをすることに対する利点について

自由記述による回答を記入させた。

3-3 調査手続き

A県の子育て支援事業団体、または個人の子育て支援者で「わらべうた」を取り入れている

「親子の会」15箇所質問紙の配布を依頼した。質問紙は各団体の担当者が調査協力者に配布し、その場で記入するよう求めた。108名の回答が得られ、回答に不備のみられた20名の質問紙を除外したため、有効回答は88名分となった。

質問紙の項目には「わらべうたの会」と記載した箇所があったが、「わらべうた」が主ではない会もあったため、これ以降質問紙で「わらべうたの会」と記載した箇所は「親子の会」と記載して述べることにする。

4. 結果と考察

4-1 調査協力者の性別・年代・子どもとの関係

調査協力者の年代は「30代」が67% (59人) と最も多く、続いて「40代」が17% (15人)、「20代」は16% (14人) であった (Figure 1. 参照)。

調査協力者の性別は全て女性で、子どもとの関係は全て母親であった。

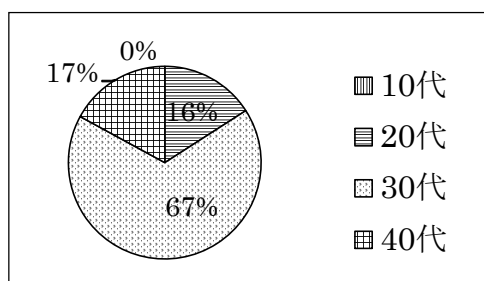


Figure 1. 調査協力者の年代 (回答者88人)

4-2 「親子の会」への参加回数

「親子の会」への参加回数は「11回以上」が57% (50人) と最も多く、続いて「初めて」が17% (15人)、「5～10回」が16% (14人) であった (Figure 2. 参照)。5回以上参加している人は全体の73% (64人) となり、5回未満の参加の人は27% (24人) であった。このことから、「親子の会」には大部分の人が継続して参加していることがわかる。

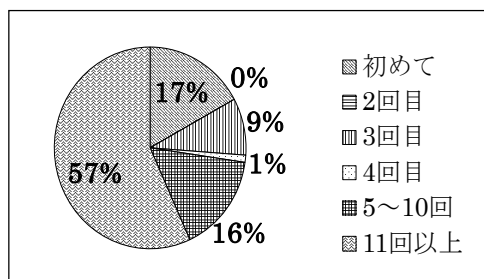


Figure 2. 「親子の会」への参加回数 (回答者88人)

4-3 調査協力者の子どもの年齢

調査協力者の子どもの年齢は「0歳」が最も多く、続いて「1歳」「2歳」が多かった。男女の差はあまりみられないようであった（Figure 3. 参照）。調査を依頼した8月の期間で、「親子の会」に参加した子どもの総数は、参加したきょうだいの人数も合わせると113人であった。

113人の年齢ごとの内訳は、未就園児と思われる0～3歳4ヶ月の子ども（以下未就園児とする）は80人、就園児と思われる3歳5ヶ月～6歳4ヶ月（以下就園児とする）は18人、小学生と思われる6歳5ヶ月以上（以下小学生とする）は15人であった。

調査を依頼した「親子の会」15箇所のうち未就園児を対象とした会は14箇所であり、小学生を対象とした会は1箇所のみであった。

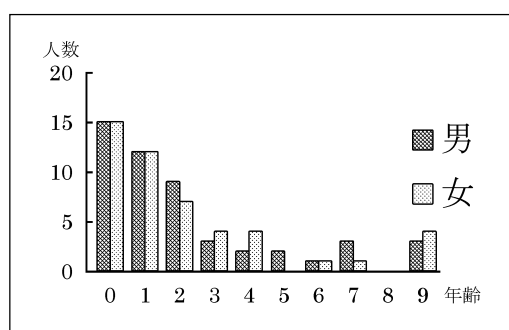


Figure 3. 参加した子どもの年齢（113人）

4-4 初めて「親子の会」に参加したときの理由

初めて「親子の会」に参加した時の理由は「知り合いに誘われた」（27人）が最も高く、続いて「わらべうたが子どもに良いと聞いた」（22人）であった（Figure 4. 参照）。いずれも人を介しての参加であったことから、既に子育ての仲間がいたことが伺える。

一方、「自分の子育て仲間が欲しい」（15人）と回答した人と「子どもに友達が欲しい」（8人）と回答した人は、子育て仲間との繋がりを求めて参加していたといえる。

なお、「わらべうたが子どもに良いと聞いた」（22人）、「わらべうたが好き」（20人）、「子どもとの関わり方を知りたい」（20人）のいずれかに回答した62人は、初めて参加した理由がわらべうたに直接関係していた。その一方で、「知り合いに誘われた」（27人）、「自分の子育て仲間が欲しい」（15人）、「子どもに友達が欲しい」（8人）のいずれかに回答した50人は、初めて参加した理由がわらべうたとは直接関係していなかった。

多くの母親がわらべうたそのものに関心をもって『親子の会』に参加している一方で、わらべうたよりも子育て仲間との繋がりを求めて参加している母親も少なくないと思われる。

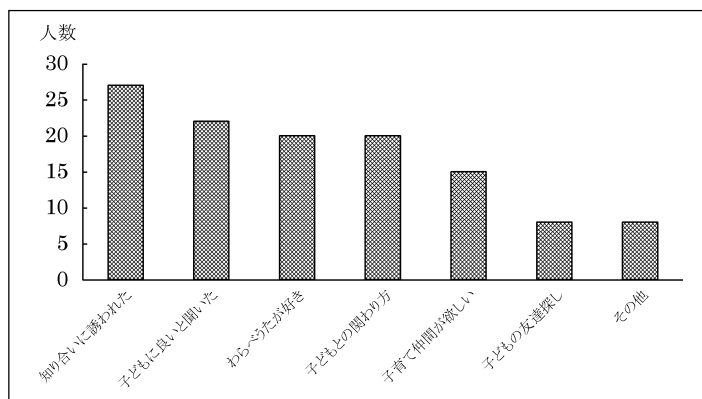


Figure 4. 初めて「親子の会」に参加したときの理由 (回答者88人)

4-5 家庭でのわらべうたの普及率

「家でわらべうたを歌う人」は全体の87% (77人)、「家でわらべうたを歌わない人」は、全体の13% (11人)であった (Figure 5. 参照)。

Figure 2 で示したように、初めて「親子の会」に参加した人は全体の17% (15人)であり、その中で「家でわらべうたを歌わない」と回答した人の割合は45% (7人)であったことから、初めて参加した人でも約半数の人が家でわらべうたを歌っている人が多かったことが示された。

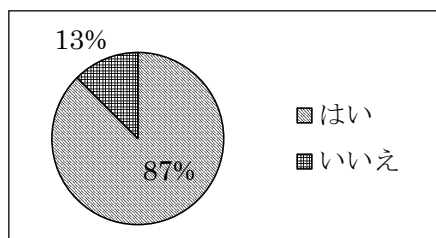


Figure 5. 家でわらべうたを歌うかどうか (回答者88人)

4-5-1 家でわらべうたを歌うかどうかについて

「家でわらべうたを歌う人」は87% (77人)、「家でわらべうたを歌わない人」は13% (11人)であった。それぞれの理由として考えられる項目について「当てはまらない(1)」～「当てはまる(4)」の4件法で評定させた得点をもとに、各項目の平均値を算出した。

(1) 「家でわらべうたを歌う人」の理由

「家でわらべうたを歌う人」の中で、その理由として最も順位が高かったのは、「子どもと一緒にあそびたい」であり、以下「わらべうたを子どもが喜ぶ」、「子どもの反応が可愛い」、「子どもの発達に良い」と続いた (Table 1. 参照)。

また、各項目について「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した人数を合算し、全体にお

ける割合を算出した結果は、「子どもと一緒にあそびたい」98% (75人)、「わらべうたを子どもが喜ぶ」96% (74人)、「子どもの反応が可愛い」94% (72人)、「子どもの発達に良い」91% (70人) といずれも90%を超えていた。

同様に「自分が癒される」、「子どもの音楽教育として良い」、「日本の伝承として大切にしたい」、についても「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した人数を合算し、全体における割合を算出すると、「自分が癒される」78% (60人)、「子どもの音楽教育として良い」77% (59人)、「日本の伝承として大切にしたい」74% (57人) であった。

最も順位が低かったのは「夫や他の家族とも共有できる」であった。「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した人の合計は63% (49人) と過半数を超えていたが、その一方で「当てはまらない」「やや当てはまらない」と回答した合計37% (28人) は、子どもが起きている時間帯の夫の不在や、わらべうた遊びを共有するきょうだいがいないなど、家庭環境が影響している可能性が考えられた。

Table 1. 家でわらべうたを歌う理由 (回答者77人)

順位	項目	平均値
1	子どもと一緒にあそびたい	3.8
2	わらべうたを子どもが喜ぶ	3.7
3	子どもの反応が可愛い	3.6
4	子どもの発達に良い	3.5
5	自分が癒される	3.2
5	子どもの音楽教育として良い	3.2
7	日本の伝承として大切にしたい	3.1
8	夫や他の家族とも共有できる	2.7

(2) 「家でわらべうたを歌わない人」の理由

「家でわらべうたを歌わない人」の中で、その理由として最も順位が高かったのは、「覚えられない」であり、以下「時間がない」、「歌うのに抵抗がある」、「興味がない」、「子どもが喜んでくれない」と続いた (Table 2. 参照)。

全体的に平均値が低い傾向がみられるのは「当てはまる(4)」「やや当てはまる(3)」と回答している人が少なく、「当てはまらない(1)」「やや当てはまらない(2)」と回答している人が多いためであった。そこで、各項目について(1)と同様に「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した人数を合算し、全体における割合を算出した。その結果、「覚えられない」64% (7人)、「時間がない」18% (2人)「興味がない」0% (0人)「歌うのに抵抗がある」9% (1人)、「子どもが喜んでくれない」0% (0人) であった。特に「子どもが喜んでくれない」という項目は、全ての人が「当てはまらない」と回答していた。「その他」の理由として36% (4人) が「うた

を知らない」ことを挙げていた。

つまり、「覚えられない」ことが「家でわらべうたを歌わない」主な理由であると考えられた。また、「家でわらべうたを歌わない」人の多くは、「時間がない」「興味がもてない」「歌うのに抵抗がある」「子どもが喜んでくれない」ことが「家でわらべうたを歌わない理由」となっているのではないと考えられた。

したがって、「家でわらべうたを歌わない」と回答した人の多くは、「うたを覚えられない」または「うたを知らない」という理由で「家でわらべうたを歌えない」のではないかと考えられた。

Table 2. 家でわらべうたを歌わない理由 (回答者11人)

順位	項目	平均値
1	覚えられない	2.8
2	時間がない	1.5
3	歌うのに抵抗がある	1.3
3	興味が持てない	1.3
5	子どもが喜んでくれない	1.0

4-6 家庭でわらべうた遊びをするきっかけになった事象

これ以降の分析は、「家でわらべうたを歌う」と回答した77人のデータのみを対象とした。

「家でわらべうたをするきっかけ」について多肢選択法（複数回答を含む）で8項目から回答を選択させたところ、「会への参加」（58人）が最も多かった（Figure 6. 参照）。

「会への参加」（58人）、「習ったことがある」（17人）、「小さい時にあそんでいた」（15人）、「祖父母が子どもにしてくれた」（8人）と回答した人は、自分がわらべうたを通して子どもと関わった、自分がわらべうたで遊んだ、身近な人がわらべうた遊びをしているのを見聴きしたなど、人を介して『直接的』にわらべうた遊びを経験していることがきっかけとなっていた。

その一方で、「わらべうたの絵本」（14人）、「わらべうたのCD」（9人）、「TVからの情報」（6人）と回答した人は、「絵本」「CD」「TV」によって人を介さずに『間接的』にわらべうた遊びを経験していることがきっかけとなっていた。わらべうたは、本来は人から人へあそびを通して伝わる伝承文化であるが、現代は伝わり方が多様化し、「家でわらべうたをする」きっかけの幅が広がっていることがわかる。

近年は子ども向けのTV番組の影響によって、忘れかけられていた「わらべうた」が世の中の注目を集めるようになった。しかし、多くの人はTV番組を視聴することが「家でわらべうたを歌う」きっかけとはなっていないことが示唆された。

「家でわらべうたを歌う」ことのきっかけとして「会への参加」が最も多かったのは、「親子の会」で『直接的』に体験したわらべうたを、家でも繰り返しやってみることができるからでは

ないだろうか。

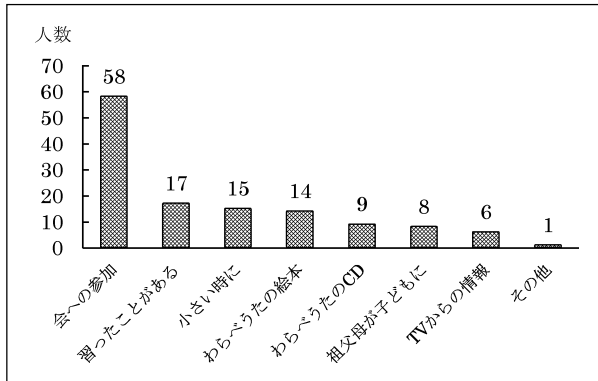


Figure 6. 家でわらべうたをするきっかけになった事象（回答者77人）

4-7 一日に歌うわらべうたの曲数

2～5曲が最も多く62%（47人）、続いて1曲が26%（20人）であった。6曲以上歌っているのは12%（9人）であり、一日に歌う曲数は88%（67人）が5曲以内であった（Figure 7. 参照）。

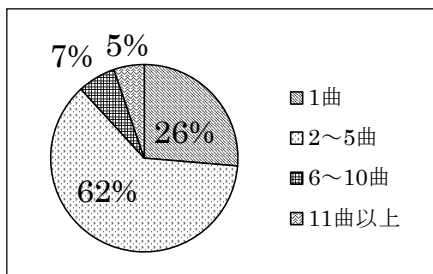


Figure 7. 一日にうたうわらべうたの曲数（回答者76人）

4-8 わらべうたを歌う場面

「家でわらべうたを歌う」時はどんな時間帯や、どんな状況かを明らかにするため、多肢選択法（複数回答を含む）で10項目から回答を選択させたところ、子どもと「遊んでいるとき」（60人）が最も多かった（Figure 8. 参照）。続いて「時間があるとき」（46人）、子どもが「ぐずったとき」（42人）、子どもが「寝る前」（26人）、子どもと「お風呂に入るとき」（20人）、子どもが「起きたとき」（12人）、子どもと「待っているとき」（10人）、「おむつ換えのとき」（8人）、子どもと「戸外に出かけたとき」（7人）であった。

子どもと「遊んでいるとき」、「時間があるとき」が上位2位であったことから、母親も子どもも気分が良い時にわらべうたを通して関わっていると考えられる。

また、「ぐずったとき」、「待っているとき」は、母親も子どもも困っているときと考えられ、母親はわらべうたを歌うことで、子どもを気分転換させようとしていることが考えられる。

「寝る前」、「お風呂に入るとき」、「起きたとき」、「おむつ換えのとき」は生活の場面である。対象の子どもは大多数が未就園児であったことから、子どもは母親との関わりを通して生活習慣を身につける時期であるが、それと同時に「機嫌が悪い」とき、「いやいやと言う」とき、「自分で言う」ときなどがあり、母親の思う通りにいかないことも多いと考えられる。

このようなとき、わらべうたを歌うことによって子どもとの関係が上手く取れ、母親も子どもも気分良く過ごせるのではないだろうか。

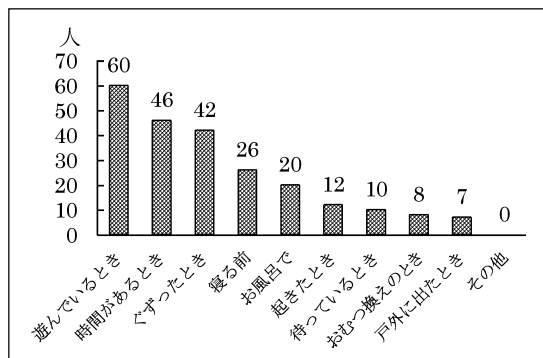


Figure 8. わらべうたを歌う場面（回答者77人）

4-9 家庭で歌われているわらべうたの曲名

家庭においてどんなわらべうたが歌われているかを調査するため、「家で歌っている」わらべうたの曲名を記述させたところ、72人から141曲について回答を得た。

しかし、141曲の中の12曲はわらべうたではなく、「いとまき」「てをたたきましょう」「ゆうやけこやけ」などの童謡であったため（Table 3. 参照）、家で歌われているわらべうたの総数は141曲からこの12曲を除いた129曲となった。

なお、「童謡」¹¹⁾もわらべうたと同様に「子どものうた」である。しかし、「童謡」は大正期以降はわらべうたのように伝承される曲を含まず、子どもたちに歌われるように作られた曲のみをさすようになった。伝承によるわらべうたとは異なり作詞・作曲者が明確である。また、明治期以降に学校教育用に作られた唱歌に対抗し、芸術性を重視して作られた曲である。

Table 3. わらべうた以外の曲（回答者15人）

	曲名	うたの種類	人数
1	いとまき	手あそびうた	2
2	てをたたきましよう	童謡	2
3	ゆうやけこやけ	童謡	2
4	大きな栗の木下で	童謡（イギリス民謡）	1
5	おもちゃのちゃちゃちゃ	童謡	1
6	きらきらぼし	童謡（フランス民謡）	1
7	きんぎょ（のひるね）	童謡	1
8	ごんべさんの赤ちゃん	童謡（アメリカ民謡）	1
9	ぞうさん	童謡	1
10	ぶんぶんぶん	童謡（ボヘミア民謡）	1
11	むすんでひらいて	童謡（作曲者：ルソー）	1
12	わーお	NHKいないいないばあうたあそび	1

4-9-1 家庭でよく歌われているわらべうたの特徴

家庭で歌われている129曲の中で最もよく歌われている上位10位までの曲は、「このここのこ」「だいこん一本」、「うまはとしとし」、「アジアシアヒル」、「たけんこがはえた」、「おふねがぎっちらこ」「こめついたら」「そうめんや」「どんどんぼし」、「いっぽんぼし」「こりゃどこの地蔵さん」の11曲であった（Table 4. 参照）。

これら上位10曲の特徴をさらに探るために、『あそびの種類』による分析を行った。その結果、「揺らしあそび」、「くすぐりあそび」、「膝・足のせあそび」、「手あそび」、「門くぐり」に分類された（Table 5. 参照）。

また同様に、母親とわらべうたであそぶことによって、子どもが刺激される『体の部位』について曲を分析したところ、「全身」か「腕・手・脇」に分類することができた（Table 6. 参照）。

大人は自分の膝や足に子どもを乗せることや、手の平や指先など様々な部位で子どもの体を刺激するが、子どもは「全身」または「腕・手・脇」をわらべうた遊びの中で刺激されることで、自分の身体を意識していると考えられる。

さらに、子どもの喜びが引き起こされる要因を、子どもに対する『主な感覚への刺激』として曲を分析したところ、自分の体が前後、左右、上下、斜め、またこれらを組み合わせた方向へ揺らされることによって意識できる「平衡感覚刺激」、自分の体（皮膚）を触ってもらうことによって意識できる「触覚刺激」、「その他」に分類することができた（Table 7. 参照）。

これらは、主な感覚への刺激であるが、子どもが母親にわらべうたを歌ってもらうときは常に目で母親の表情や体の動きを追い、耳で言葉やうたを聴き、あるときは母親の乳の匂いやその時の周りの匂いを感じており、あらゆる感覚器官を統合して刺激を受けていると思われる。

Table 4. 家庭でよく歌われているわらべうた (上位10曲)

順位	曲名	度数	あそびの種類	体の部位	道具・場面	主な感覚への刺激
1	このここのこ	16	揺らしあそび	全身		平衡感覚刺激
1	だいこん一本	16	くすぐりあそび	全身		触覚刺激
3	うまはととし	12	膝のせあそび	全身		平衡感覚刺激
4	アジアシアヒル	10	足のせ	全身		平衡感覚刺激
5	たけんこがはえた	9	揺らしあそび	全身		平衡感覚刺激
6	おふねがぎっちらこ	8	膝のせあそび	全身		平衡感覚刺激
6	こめついたら	8	手あそび	手(甲)	お手玉	触覚刺激
6	そうめんや	8	くすぐりあそび	腕・手・脇		触覚刺激
6	どんだんばし*	8	門くぐり	全身		(空間知覚)
10	いっぽんばし	7	くすぐりあそび	腕・手・脇		触覚刺激
10	こりゃどこの地藏さん	7	揺らしあそび	全身		平衡感覚刺激

*「どんだんばし」は主に幼児のあそびであるが2歳くらいから大人と手を繋いだり、少し高い所を歩いたりする時にも歌われていると思われる

Table 5. あそびの種類

あそびの種類	度数
揺らしあそび	32
くすぐりあそび	31
膝・足のせあそび	30
手あそび	8
門くぐり	8
計	109

Table 6. 体の部位

部位	度数
全身	86
腕・手・脇	23
計	109

Table 7. 主な感覚への刺激

主な内容	度数
平衡感覚刺激	62
触覚刺激	39
その他	8
計	109

4-10 家庭でわらべうた遊びをすることに對する利点について

「家でわらべうたを歌う人」77名の回答の中から記述のなかった8名の回答を除き、69名の自由記述の回答を分析した。

「家でわらべうたをして良かった」と思うことは、個人によって違うが、「子どもが楽しそう」「楽しく子育てできる」など一文につき1つの項目として整理できる内容のものと、「親子で遊ぶ・ぐずるときなだめられる」や、「子どもとふれあいたいとき、待ち時間をもてあましているとき、ぐずっているとき、子育てに活かされた・見ていて幸福な気持ちになった」など、一文に複数の項目が含まれる内容のものに区別することができた。

まず、一文を1つの項目として整理できる36の文章について、筆者と大学院生の3名でKJ法的分類を行った。その結果、文章を5つに分類することができたため、各カテゴリーを『育児』

『共感・共有』『子どもの反応』『母親の心情』『音楽への親しみ』と名付けた (Table 8. 参照)。以下に、それぞれのカテゴリーの内容を示す。

Table 8. 自由記述の分類による各カテゴリー名と内容

<p>① 『育児』</p> <p>「子育てを楽しくできる」「あやし方がわかる」「ぐずるときなだめられる」「子どもがリラックスして眠りにつきやすい」など、子どもとの関わりを上手くもつことができることによって、母親の子育てに役立っていると思われるもの。</p> <p>② 『共感・共有』</p> <p>「子どもと一緒に笑顔になれる」「親子で楽しい時間が過ごせる」「子どもと一緒に触れ合って楽しめる」「子どもと心が通じる」など、母親と子どもが同じことをしたり、同じ気持ちであることに喜びがあると思われるもの。</p> <p>③ 『子どもの反応』</p> <p>「子どもが楽しそう」「子どもが喜ぶ」「子どもが笑顔になる」「子どもが心地よさそうにする」など、子どもの反応を母親が肯定的に受け止めていると思われるもの。</p> <p>④ 『母親の心情』</p> <p>「心が穏やかになる」「おもしろい」「楽しい」「癒される」「子どもがかわいい」「子どもに向き合って過ごす姿勢が自分にできてきた」「見ていて幸福」など、母親自身や子どもに対する肯定的な感情と思われるもの。</p> <p>⑤ 『音楽への親しみ』</p> <p>「音楽が好きになった」「きっちりした音やリズムがないので気楽に歌える」「小さな子でも歌える」「リズムに合わせて手を叩いたりして成長しているのがわかる」など、音楽への親しみが伺えるもの。</p>

一文の内容が1つであった36の回答の中で最も多かったのは『子どもの反応』(28%)で、続いて『育児』(22%)、『共感・共有』(22%)、『母親の心情』(17%)、『音楽への親しみ』(11%)であった。

次に、一文に複数の項目が含まれる残りの33の文章について、それぞれの文を独立した1つずつの内容に区切った後、同様の方法で上記と同じ5つの同じカテゴリーに分類した。

一文の内容に2つの項目が含まれると捉えられた28の回答は、独立した1つずつのカテゴリーに区切ることができ、56の回答として分析された。その結果は『育児』(35%)、『共感・共有』(27%)、『子どもの反応』(21%)、『母親の心情』(13%)、『音楽への親しみ』(4%)であった。

一文の内容に3つ以上の項目が含まれると捉えられた5つの回答は、独立した1つずつのカテゴリーに区切ることができ、24の回答として分析された。その結果は『育児』(34%)、『共感・共有』(24%)、『母親の心情』(21%)、『子どもの反応』(18%)、『音楽への親しみ』(3%)であった。

独立して分類した全ての回答内容116をカテゴリーごとに合計すると、『育児』が36(31%)と最も多く、続いて『共感・共有』29(25%)、『子どもの反応』26(22%)、『母親の心情』19(16%)、『音楽への親しみ』6(5%)となった。つまり、以上の結果からは「家でわらべうたをして良かったと思うこと」の内容に、『育児』面を挙げている人が最も多いことがわかる。

「わらべうた」を通して子どもと同じあそび、同じ気持ち、同じ時間を『共感・共有』し、笑ったり、喜んだり、楽しそうにしている『子どもの反応』から、母親自身も「見ていて幸福」を感じる、というように育児全体に余裕をもたらしているのかもしれない。

なお、親子の会に参加する回数別で同じカテゴリーで再集計すると、参加回数が1回から4回までの比較的少ない場合は、「家でわらべうたをして良かったこと」の内容に『子どもの反応』が一番多く含まれる傾向がみられ、参加回数が5回以上の比較的多い場合は『育児』の内容が多く含まれる傾向がみられた (Table 9. 参照)。

Table 9. 参加回数との関係

親子の会参加回数	1回	2～4回	5回以上
育児	3	3	30
共感・共有	3	2	24
子どもの反応	5	3	18
母親の心情	2	1	16
音楽への親しみ	1	0	5

家庭で「わらべうた」を歌う機会が増えるに従って、はじめはわらべうたに対する子どもの反応に注目していた段階から、次第に子どもと喜びを共感・共有できるようになり、子どもがぐずったときには以前よりも上手くあやすことができ、子どもが寝るときに習慣的に歌うようになっていったと考えられる。その結果として、母親自身も自分や子どもに対して肯定的な感情が持てるようになり、わらべうたの持つ音楽性にも親しみを持てるようになっていったと考えられる。

つまり、わらべうたを家庭で歌うことで、母親と子どもが上手くコミュニケーションを取ることができるようになり、子育てがスムーズになるため、母親自身にも余裕ができ、子どものことがより可愛いと思えるようになるというような良い循環を生み出すのではないだろうか。

いずれにしても、「わらべうた」を子育て支援事業の一環として提供することは、家庭において母親と子どもの両者を支援しているといえる。

引用文献

- 1) 小泉文夫 2009 合本日本伝統音楽の研究 音楽之友社 Pp.34-41.
- 2) 小泉文夫編 1969 わらべうたの研究 研究編 わらべうたの研究刊行会 P.256.
- 3) 和田幸子 2010 わらべうたを用いた障害児保育の実践 三学出版 P.31.

- 4) 正高信男 2001 第3章 発声はリズムによって 子どもはことばをからだで覚える —メロディから意味の世界へ— 中央公論新社 Pp.63-94.
- 5) 山口創 2003 くすぐり遊びと親の養育態度の関連について 第67回日本心理学会大会発表論文集 P.1032.
- 6) 木村はるみ うたおう あそぼう わらべうた —乳児・幼児・学童との関わり方— 雲母書房 P.13.
- 7) 丸山美和子 リズム運動と子どもの発達 保育が好きになる実践シリーズ かもがわ出版 Pp.43-44.
- 8) 前掲書6) P.15
- 9) 柏女靈峰 2000 子育て支援 山縣文治・柏女靈峰 社会福祉用語辞典 ミネルヴァ書房 Pp.99-100.
- 10) 齊木美紀子 2008 音楽教育研究ジャーナル 30, Pp.13-23.
- 11) 繁下和雄 1983 童謡 小学校音楽教育講座 第10巻 音楽教育用語辞典 音楽之友社 Pp.127-129.

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきましたA県の子育て支援事業団体、または個人の子育て支援者で「わらべうた」を取り入れている「親子の会」の関係者と参加者の方々には心よりお礼申し上げます。